第１回　富山県経済・文化長期ビジョン懇話会青年部会　議事要旨

１　日時：平成２７年１１月９日（月）16:00～17：55

２　場所：県民会館 8 階バンケットホール

３　出席委員（五十音順）
飯田委員、五十嵐委員、内山委員、大坪悟委員、大坪洋介委員、大野委員、大屋委員、金岡委員、黒川委員、清水委員、髙下委員、髙島圭史委員、高島千絵委員、高田委員、田中委員、田村委員、中林委員、新鞍委員、野尻委員、野村委員、濵角委員、針木委員、盤若委員、藤井委員、藤澤委員、松井委員、松本委員、向井委員、森委員

４　議事
（１）策定の趣旨、策定の進め方、スケジュール
（２）意見交換

５　発言要旨
（１）　開催挨拶　石井知事
・　北陸新幹線の開業の勢いを一過性にしないでしっかり持続させて、新たな富山県の発展、飛躍につなげていかなければならない。人口減少対策を含めた地方創生ということを国の重要政策の一つにしていただくことができた。この北陸新幹線開業と政府の地方創生戦略の二つのフォローの風をしっかり生かして、富山県の新たな未来をつくっていきたい。
・　ただ、地方創生については、5 年間の計画であり、これと並行して、富山県の 10 年先、20 年先、30 年先を展望して、特に経済や文化、経済や文化を担う人づくりといったテーマを中心にして、長期ビジョンを大いに議論していただくための県内外からの有識者から懇話会を立ち上げたところであるが、併せて、将来の富山県、日本を担う若い方の意見を聞く場を設けたいと考え、この青年部会を設けさせていただいた。
・　第 1 回懇話会では、若い方のご意見を聞く青年部会を設けたことは大変よいことだ、どんな意見が出るか楽しみだというようなご意見もあった。委員には、富山県、日本の将来、また自身の今後の将来のライフプランを念頭に置いて、自由闊達な斬新なアイデア等を提言いただきたい。
・　先日の 6 月に実施した高校生アンケートでは、「ずっと富山に住みたい」「一度県外に出ても、また戻って富山に住みたい」と答えた高校生が約 6 割おり、10 年前の 55%、5 年前の 57%と比べてだんだんと富山に愛着を感じ、誇りを持って、富山を本拠として頑張ろうというような人が増えているのではないかと感じている。

（２）　幹事指名、代表幹事・副代表幹事互選、分科会の設置
・　設置要綱に基づき、幹事として清水委員、長岡委員、中林委員、藤井委員、田中委員、田村委員を知事より指名し、また、幹事の互選により代表幹事として藤井委員を、副代表幹事として清水委員を選任した。
・　議論を効率的に進めるため、主に経済分野を検討する第 1 分科会、主に文化・人づくり分

野を検討する第 2 分科会の２つの分科会を設けた。

（３）意見交換

（委員）

・　高齢化問題は、私たちが新聞や報道で読む以上に非常に危機的なものだと実感しているが、地域包括ケアということで、それぞれの土地に合った解決方法があるのだろうということも分かってきている。今は、何か強いリーダーが全てを解決してくれるという時代ではなく、それぞれの地域の人が力を合わせて、フォロワーシップのような形でよいところを引き出してやっていくということを富山県ができるだけ早く取り組むことによって、ずっと元気で社会に必要とされる生涯現役がナンバーワンの県であることを目指すべきでないか。

・　危機は危機としっかり認識しつつ、日本だけでなく世界を富山がリードしていくというような世界観でビジョンが作成されたら、すごく面白いのではないかと思う。

（委員）

・　工業県、ものづくりの県である富山県が、さらに国内でも確固たる地位を確立するようにしたい。

・　ものづくりでのグローバルな世界の競争での経験を、ものづくり以外のところにおいても、十分生かせるところもあるのではないか。

（委員）

・　会社において、人がいない、高齢化の進展が進む中で、一人一人の仕事の効率性向上や能力アップ、必要な業務の取捨選別といった、生産性の向上に取り組んでいる。県や市町村、各企業でも同じような状況ではないかと思われるので、各々が生産性向上を推進することで、県全体の生産性の向上につながっていくのではないか。

（委員）

・　若い世代、特に 20 代前半の女性の首都圏への転出が非常に多い。富山県は非常に住みやすいと思うが、若い世代が県内にある企業に就職したいと思うことができるかどうか、魅力的な企業があるかどうかという点においては、まだまだ問題があるのではないか。

　そのため、富山県や県内企業の魅力を富山県出身の学生だけでなく、全国の学生に対して伝えていく必要があるが、Ｕターン事業を富山県だけで実施するには限界があると考える。県内出身者が多い大学の就職課・キャリアセンターと協働や、学生が多く登録している就職サイトとコラボして、学生へアプローチ、PR をしていくこともよいのではないか。

（委員）

・　企業が「次の成長」をするために、自ら研究開発して事業化していくことであるが、成功確度はあまり高くなく、多額の費用も掛かることもある。そのため、東京では、M&A マーケットで企業の売買が盛んで、Ｍ＆Ａや業界再編に投資をして会社ごと買って企業体力を付けるということをやっている。県内でもこうしたリスクのある投資を行えるような仕組みを作れないか。

・　イノベーションを自社だけでは中々できないこともあるので、オープンイノベーションの

仕組みを富山県でつくることができれば、ベンチャー企業が多く生まれるという良い循環ができるのではないか。また、逆に、廃業を早くしてもらえる環境をつくるというようなところを検討してみてはどうか。

（委員）

・　富山の魅力を伝えるために、県内外の人を対象に富山で面白いことをやっている方を講師として色々な学びをしたり、眺めの良い場所で富山のおいしい食べ物で、おいしいワインを飲むというイベントを行っているが、県外から来た方の富山の評価は自分たちが思っている以上に高い。

　ただ、富山は観光の受け入れとしてはまだまだ弱いところがある。観光産業が富山でもっと発展していけば雇用の場も生まれるし、県外の人がまず観光に一度来てもらうことで定住や移住に結び付くということもあるので、もっと強化できればよいのではないか。

（委員）

・　「ないものねだりではなくてあるもの探しをしよう」という精神で、今ある建物で有効に活用できるものはないかと考えると、お寺を活用するのがよいのではないかと思う。富山は真宗王国でお寺がたくさん残っている。そこで、子どもたちがおじいちゃんやおばあちゃんから歴史や文化を学んだり、心を育ててもらったり、老いた人も若い子としゃべることで若返りにもなるし、移住者の人たちとのコミュニケーションの場としたり、富山の良さを伝える「NORINTEN」の映画鑑賞や富山を再発見する雑誌を見てもらうことで富山はこんなにすごいのだとも思ってもらえないか。また、お寺には、富山仏壇、高岡仏壇、城端仏壇といった地元の人がつくった素晴らしい技術が集まる環境であり、美しいものはこんなものなのだということを小さいときから植え付けておけば、目利き力、美意識のアップになる。

　金銭的価値が豊かさや幸せのバロメーターになっているが、本当は創造することに価値があり、幸せや豊かさにつながるということを今の子どもたちに伝えていくことが大切なことではないかと考えている。お寺でこうしたことすることで、それが誇りになって、「おらっちゃの国っちゃ、こんなすごいがよ」と言ってお国自慢できる子たちが、どんどん増えていくことが期待できるのではないか。

・　働きながら子育てをしているお母さんに、働きながら育てる環境についてどう思うか聞いてみたところ、学校が終わってから預けられるところをせめて７時まで延長してほしい、土日出勤するので土日も預けられるようになったらいいのに、という声があった。

（委員）

・　せっかく長生きするなら、ただ寿命が長いだけではなくて生涯現役で、まさに健康寿命日本一、世界をリードするような県の実現に向けて努力したい。

・　富山県の産業、経済活性化については、やはりものづくり県としてしっかりした、確固たる地位を日本で、場合によっては世界の中でも築いていくということが一つ大事なテーマだと思う。また、観光など、いろいろな分野でまだたくさん可能性があると思う。

　また、同時に、ものづくり県として立派になるには、先端的な技術ということだけでなく、デザインや文化ということが大切ではないかと思う。

・　いい人材を採るのに、富山県が富山県関係者だけに限定してやるよりも、例えば富山県出

身者あるいはゆかりの人の多い大学と連携するというのは、いいご提案ではないかと思う。

・　ベンチャー企業をしっかり支援する、また、新しい芽を育てるためには廃業をむしろ早くやってもらうということも必要だという話もあったが、誤解がないようにしなければならないが、こういったことを若い方に言ってもらうことは、大変心強い感じがした。

・　本県の観光を押し上げるのにまだまだ手薄だと思うが、同時に、非常に伸びしろが大きいということだと思う。全国でも屈指の観光資源の多いところであり、アピールの仕方によっては、世界の中でも十分その存在感を示しつつあるが、ぜひそういうふうにやっていきたい。

・　「ないものねだりではなくてあるもの探し」というのは、大変よい。

・　どうしても我々は経済の発展や成長など、人間の幸せの価値を金銭で測りがちである。それも大切であるが、例えば創造すること、新しいものをつくっていくこと、あるいは自分が持っているさまざまな可能性を最大限に伸ばしていくこと自体に価値がある。それが県民の皆さんの人生を充実させていくこととなるという議論も大いにしてもらいたい。

（委員）

・　県のものづくりに携わっている方たちが一生懸命技術を発揮できるために、その胃袋を僕たちが安心・安全な食物を作ることで守り支えているという思いで一生懸命農業をしている。

・　循環型農業ということで、野菜などを作るために家畜のふん尿などの有機肥料を使うと、臭いが出て、地域の方々から臭いからやめてくれという声も出てくる。循環型農業が大切であるという理解者を増やしていくために、子どもたちが農業を理解できるような教育が必要でないか。

・　高齢者などを病院への送迎が大変となってきている。

（委員）

・　強い富山県経済を維持していくためには、強い産業を育んでいくこと、働き手を育んでいくこと、それを内側から創出することで、富山県で働く人が増えて、生活する人が増える仕組みをつくっていかなければならないと考えている。

　そのため、企業の地方移転や中央省庁や国の研究機関なども地方移転も進めてもらいたい。また、企業活動で大事な労働力、特に女性と若者の労働力の確保に取り組んだらよいのではないか。県は県内企業が欲しがる労働力を把握し、高校や大学と連携して必要な職業や必要な生徒数の確保を見通し、県立高校の在り方、再編を考えたらどうか。また、大学に成長産業である医薬品業を担うような学生、高度ものづくりを支えるような学生たちを集めるための学部充実を考えてはどうか。

　女性の雇用率が高い、あるいは復職率が高い企業には、税制面や助成金などの優遇があってもよいのではないか。

・　地方創生は、地方間の競争に過ぎなければ、すぐに限界が訪れると思う。

（委員）

・　富山では車がないと交通にものすごく不自由する。例えば観光地がたくさんあるが、どこに観光地があるかが分かりにくくて、車もないのでどうやってそこまで行ったらよいのか、いつも悩む。例えば、はとバスのようなものがあれば、東京からのゲストの方を連れていってあげるときにもよいのではないかと思う。

・　石川県の加賀屋のような目玉になるようなホテル・旅館も足りないのではないか。
・　文化の向上という意味で、東京と富山はレベルの違いがすごくあり、まちのセンスの向上も必要ではないか。富山の人が金沢までお買い物に行くことが多いと聞いているので、富山でもお買い物が十分にできるような環境もできたらよいのではないか。

（委員）
・　県内でイベントを行う際に、イベントスペースに給排水設備や電源がないなど、環境が整っていないところが多く、イベント開催に予算等が掛かる。もっと簡単にいろいろな人がイベント等を開催できるようにすれば、もっとまちのにぎわい、いろいろな地域でのにぎわいが出てくるのではないか。
・　子育てに関して、３世代同居で祖父母に面倒を見てもらえるというのは、いろいろな歴史を教えてもらったり、しきたりを教えてもらったりという教育的な側面もある。二世帯住宅への補助を増やすなど、子育ての環境を整えればよいのではないか。

（委員）
・　高岡は特に曳山祭とか御車山、七夕のお祭りがあって、オン・オフがすごい。オンのときはやはりいいな、オフがちょっとと思いながら過ごしている。
・　富山の風景、散居村の景色は本当に美しくて、これは本当に残していかなければいけない。富山の文化的な未来、日本の文化的な未来は、過去に地域が持っている歴史にある。
・　県と大学は、特に文化的な文系の研究などは、もっと提携して、協力していかなければいけないのではないか。

（委員）
・　伝統工芸は、技術の遺伝子を未来へ運ぶプロジェクトだと思っている。ヒット商品をとにかく生み出しやすい富山というものを、ぜひ考えていきたい。
・　海外からお客さまを呼ぶといった場合に、どうも富山だけでは弱くて、東京で止まってしまう。新幹線もできたが、まだまだ情報が少ないということもあるので、伝統といえば富山、世界の中のデザインといえばやはり富山だよね、というような未来を創造できたらなと考えている。

（委員）
・　仕事で海外と交渉する中で、外に向かっていく力とか、そういう世界の人たちと渡り合っていく力がこれからはすごく大事になってくる。富山には産業などいろいろな強みがあると思うので、もっともっと海外の市場でシェアを奪っていけるようにするためには、人の教育をもっとグローバルにしていく必要があるのではないか。義務教育などのもっと小さいころから、いろいろな文化に触れ合う機会を増やしたり、異文化を認めて自分の文化に対する理解をもっと深める、自分の意見を他人にちゃんと伝える力を付けるといったことを教育できれば、社会人になったときに力となり、企業の成長につながるのではないか。

（委員）
・　富山県というと、「薬の都・富山」と呼ばれるように、富山は薬というイメージが定着して

いる。県外から観光客が来てもらえる恵まれた資源、食材も豊富である。富山は薬もある、おいしい食事や健康的な食事もあるというイメージをさらに拡大し、そのような恵まれた環境の10年後、20年後、30年後の富山県は健康寿命日本一の県であってほしいと思う。日本一になれば、健康な高齢者が多くなることで生産年齢人口の減少もカバーでき、また、健康で安心して生きられる県、より住みやすい県というイメージを高めることができ、人口の流出の防止や県外からの移住の促進できるのではないか。

（委員）

- 仕事で、外国人実習生のベトナム人やインドネシア人の方とよく話す機会があるが、発展途上国ということもあってか、非常に向上心が強く、大変勉強熱心である。
- もっと多くの中小企業にたくさんの外国人を受け入れてもらい、外国人に富山県のことを知ってもらえば、国に帰ったときに日本、富山はいいところだよという紹介をしてもらえるのではないか。また、外国人と日本の若者との交流が進めば、外国への興味のきっかけになるし、また、富山で結婚して生活している方もいるので、一石二鳥ではないか。

（委員）

- 今後、人口構成比が高いシニア世代、70歳ぐらいの人たちを現役世代と考えた場合、その暗黙知みたいなものをもっともっと形式知にしていく必要があるのではないか。そうした、例えばOBの充実であったり、シニア世代の企業支援みたいなもので、伝統技術、ノウハウの継承や、労働生産性の維持・向上につなげていけるのではないか。
- 人を呼び込む政策と人をとどめるために、富山県を伝統工芸・文化の聖地（メッカ）とすべく、世界中から職人、研究者が集まるような技と知のセンターみたいなものを立ち上げていくことで、文化力を世界に発信していけると思う。そのために、ハード、ソフトの両面でインフラを一体的、総合的に考えていけるような仕組みが必要なのではないか。
- 長期的なビジョンで見た場合に、富山だけではなく、他県との広域連携を含めて、富山県では何が期待され、誰に何が喜ばれるのかといった観点を踏まえて取り組んでいくことで、好循環につながっていくのではないか。

（委員）

- ものづくりの中の科学技術を富山から世界へと発信していくために、発信できるような環境、発信できる技術、そして優秀な人材を今まで以上に醸成できるような環境があればよいと思う。

（委員）

- 富山市の「環境未来都市」構想のコンパクトシティ事業において、コンピューターユーティリティー、インターネットが本当に身近にあり、すぐに手を出せば使えるようにするお手伝いをしているが、富山ならではで、自然と次世代技術、未来と歴史文化のバランスが非常に取れている地域だと感じている。
- 県外の方から「富山って何？」と言われることが多々ある。食材なのか、自然なのか、文化なのか、と言われると、一つの富山ブランドというものがつくられていないのではないかと思う。それをつくり出すことで、30年後に向けた富山だからこそこれがあるというような

一つのストーリーができて、ブランドとして売り出すことができるのではないか。

（委員）

・　富山県の経済、特に人口減少、若者の地方離れについて考えると、富山県は「生活に困らない田舎」ではないかと感じている。周りに緑もたくさんあるが、生活サービス機能が充実し、ちょっと移動すれば必要なものが手に入りるし、食も豊かで物価も安くて、お金のない若者にとってはとても生活しやすいのではないか。

　あとは人が集まるきっかけをあればよいと思うので、富山の強みである自然災害の少なさ、豊かな水資源、交通インフラといった良い点を前面に出して PR して、企業誘致に取り組んではどうか。特に富山で古くから根付いている医薬品関係の企業に特化して誘致に取り組むのが効果的ではないかと思う。こうした活動によって雇用が拡大すれば、若者の定住につながり、富山がより活性化すれば素晴らしいと思う。

（委員）

・　農業は、高齢化によりどんどん農業人口が減ってきて、後継者もいないというのが現状である。どうにか担い手を増やし、富山県でとれた野菜や米をどのようにして富山ブランドとして売り込んでいくかが今後の課題である。

・　外国人や県外、女性の方に農業を体験してもらうなど、国内外の方に富山県の農産物を売り込み、県外からの移住者を増やし、女性の方や若い方にも農業を身近に感じてもらえる機会をつくりたい。富山県は自然災害も少なく、農業にも適しているし、子育て支援も充実して子どもを育てやすい環境であるので、それを知る機会を増やすことで、富山の人口減少をストップさせられないか。

（委員）

・　仕事で県外の方が地元に来られるが、「これからどこに行かれるのですか」と聞きましたら、ほとんどの方が大手のショッピングモールに行くと答えられる。せっかく地元に来てもらったのに、そこで経済が全く動いていないというのは寂しい。経済が動くということは、魅力ある商店が一つでも多くクリエートされることだと思って、地元のお店や銀行と手を組んで、一緒にワークショップなどをしている。

（委員）

・　建築業界に入って 10 年ぐらいたつが、全然若い人たちが入ってこない。大きな仕事　になると県外の職人さんがやってきて仕事をしていくという状況が続いている。このままでは富山県の建築業界が悪くなっていくという部分も含め、建築・建設業に入ってこようという若者がいなくなってしまうと思うので、きつい、危険、汚いというイメージを払拭して、入ってきやすい業界にしていきたい。

（委員）

・　多くの友人が東京や大阪で就職してしまう。優秀な人材が首都圏に取られてしまうというのは、今後 10 年、20 年先を考えたときに大きな損失になると思う。

　いずれは富山に帰りたいと言っている人も多いが、実際に結婚してしまうと、戻れないと

いった話も聞くので、新卒の段階で富山の企業に就職してもらえるようにアピールをしてはどうか。就活生が自ら足を運ばないと話を聞けないようなイベントだけではなく、例えば大学にある県人会とか、富山県の寮などを通じて、もっと広く就活生に周知していくような形ができればよいのではないか。

「富山の企業を知らない」と富山県出身の人も言うので、まず企業名を知ってもらうというところが大事なのではないか。「14 歳の挑戦」で職業体験をするが、高校生などの自分の将来を見据えた段階で県内企業と接点を持つようなイベントや就職体験をすることで、県内企業の PR につながるのではないか。

（委員）

・　どんな富山であってほしいかというと、やはり今と変わらず、今後も自然豊かで、安心・安全で住みやすい、そういった富山であり続けてほしいと強く思う。ただ、現状維持を望むだけでは、生産年齢の人口の減少、少子高齢化の波の中でこの住みやすい環境が失われていくのではないか。

そのため、特に重要だと考えているのが、若い人にいかに富山に帰ってきてもらい働いてもらうかということである。就職活動のタイミングなど、さまざまな転機を迎える富山にゆかりのある県外で働いている方々に対して、いかに富山の情報を発信して PR するか、富山とのつながりを感じるコミュニティーをつくって広げていくかということが大事でないか。

（委員）

・　どこに観光に行っても「うちの方が魚がうまい」とか文句を言うのは、北海道と富山県だけらしいという話を聞く。食というテーマと、シビックプライド、地元愛とか、地元の祭りとか、そういうもので次世代にとやまの魅力を感じてもらえばどうか。

・　富山県でもビジネスとしても面白いことができるということを次世代に感じてもらうために、高校の購買部を支援する企画を行っている。高校生が校内でマーケティングをし、友達が好きなものを探して、仕入れて売るという、商売の基本の面白さを教えている。

・　富山県の魚と張れるぐらいの面白い県外の魚を仕入れ、富山にないものを持ってきて、富山を面白くするということをやっていきたい。

（委員）

・　現在、富山の 30 年後とかそういった流れの中で考えるとなると、観光であったり、留学というところから考えられるのではないかと思う。

留学という観点で見ると、海外の友人や留学生が、富山に住みたいという環境、来県する環境をどのようにつくれるかということを、ベンチャー企業をつくって行うというのは面白いのではないか。また、海外の人に富山で創業してもらうとか、富山に支社をつくってもらうとか、新しい会社をつくってもらうということができればよいのではないか。

そういったことを増やしていって、国際色豊かな都市を実現することによって、自分の子どもたちや孫たちが、グローバルな環境を富山で味わうことができる。そうすることによって 30 年後の富山が少し見えてくるのではないかと考えている。

（委員）

・　人口減少がやはり根本的な原因であり、人口が増えるようなことも検討すればよいのではないか。周りに「子どもをたくさんつくったらいいよ」という話をするが、「せいぜい 2 人です。それ以上はお金が厳しいです」という話になる。子どもがたくさん生まれても家計が成り立つような支援があったり、教育に関しても他県とは違う、富山県ならではの教育プログラム、義務教育ではなく富山県はこんな子どもの育て方をするのだね、面白いねということで、人が富山に住んでくれるような教育プログラムもできたらよいのではないか。

（委員）

・　ロボットはものすごく進化し、今は力覚や視覚という分野を超えて、人間でいう脳みそである人工知能の部分もすごく研究され、ヨーロッパでもかなり生産性などを変革させるような取り組みがなされている。

　ものづくりは生産性の向上ということもあるが、最終的には自然と環境を壊さない産業というところでないか。そういった最先端の技術に関わるベンチャー企業を誘致するというのも一つである。そういった中で世界の中の富山県となってもらいたい。

以上

（速報のため、事後修正の可能性があります）